

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

21 耳の印は他人のため

第二十一日め（四月五日）

「ハンシ・サイン・ネーレー」

けさは、いつもとちがつて、朝の挨拶がある。これまで毎朝、おはように相当することばはなかった。わたし一人が、よくねむれましたかなどと挨拶していた。ところが、きょうはちがう。人びとは、ハンシつまり清明節がよろしく明けた、と挨拶をかわした。一昨日から急激に悪化した天候も、清明節のおとずれとともにおだやかになり、まさに「あけましておめでとうございます」である。

清明節があけたこの日、ウルジーチンゲルが墓まいりにでかけた。墓は、オンゴンとよばれる。かつてのブリガードの中心地の東南方向、およそ二十キロメートルの地点にあるという。これまで、モンゴルの草原で墓というものをみたことがない。どのようなものか、好奇心がうずくけれども、おとなしく家でまっていることにする。

墓についたら、まず叩頭する。つぎにアラシャンとよばれる聖水をそそぐ。また、アルガル（牛糞）で煙をいぶす。つまり香をたくことに等しい。さいごに土をすこしかぶせるのだそうだ。ウルジーチンゲルは、聖水と称して、白酒を小さな瓶につめて、ふろしきにつつみ、懷にいれて、出馬した。

墓オンゴンには、モージ母の親族がねむっているという。モージの母、ラマ僧だった兄、二人の姉、

さらに親族一人という計五人の墓である。モージ母は、もともとこの土地の人間ではない。北から一家で移住してきた。ダンゼン父も、この住人ではなく、単身で南から移住してきた。だから、墓といっても先祖代々の墓という性格をもつわけではない。むしろ、所属をうしなつた立場にある人たちの合同墓にちかい。

もしモージ母が死んだら、ここにはいるという。しかし、ダンゼン父の墓は、自分で場所をえらぶことになる、ともいう。父の祖先のオンゴンは、父の出身地であるチャハル地方ホボート・チャガーン旗にあり、もはや出身地にもどる意思のない父は、みずから別の場所をえらぶのである。

いまウルジーチンゲルが出向くオンゴンは、けつして本家の墓ではないことがわかる。母方の墓なのである。それで、本家ではなく、分家のウルジーチンゲルが、母にかわつて、墓まいりをする、という次第であるらしい。

ウジチャが墓まいりにいっているあいだに、きょうも一日さまざまな牧畜作業がすすめられた。いつものような哺乳補助の作業のほかに、母ヒツジさがしと、養子縁組と、耳切り作業と、子畜の死体処理がおこなわれた。

まず、母ヒツジさがし。例によつて、子ヒツジがいるのに、その母がみあたらない。きのう吹雪のあいだに草原で誕生した子ヒツジ・子ヤギは全部で五匹。うち一匹の子ヒツジに、それらしい母がみあたらない。結局、双子と判断され、ヒツジたちに匂いをかがせた。匂いで実子のようなそぶりをみせたのは、エルデニ姉のヒツジ。それゆえに、その子ヒツジはエルデニ姉さんのものになり、彼女が面倒をみることになる。彼女はさつそく、その子ヒツジに適当な乳母をあてがつて哺乳を補助するのであった。

つづいて、養子縁組。吹雪きはじめたおととい草原で生まれ、きのう石垣のなかで死んだ子ヒツジの母親は、お産のベテランで、乳の出もよい。死産でもないし、流産でも早産でもない。偶然に子をうし

なった母ヒツジである。これこそは養母にうってつけ。あの二匹のみなし子ヒツジたちの養母にしようという計画がたてられた。二匹のうち、幸運にもさっそく養母にめぐまれるのは、鼻の白いほう、哺乳びんから飲むときも素直だったほうである。

養子縁組をとりしきるのは、本家の嫁セルゲレン。というのは、いま養母候補になっているヒツジが、本家のヒツジであるからである。彼女は、石垣ヘレムの一角の暗室のなかで、養母ヒツジを柱にしばらくつけた。モージ母がするように、母ヒツジをしばらくつけたまま子ヒツジと二頭つきりで放置した。すでに子ヒツジのほうは、生後二十三日めをむかえて、かなり大きくなっている。養母のほうは一昨日出産したばかりである。突然大きくなった子を、はたしてわが子としてうけいれるであろうか。養母の下腹部に何度ものぐりこもうとこころみる子ヒツジは、そのたびに、足蹴りをくらったり、頭突きをくらってしまふ。せっかく養母をえたといつても、しばらくは子ヒツジの受難がつづきそうであった。このような養子縁組のときに、しばしばうたわれるという「トイグ」の歌を、セルゲレンはうたわなかった。養母ヒツジの乳や尿などのしみを養子ヒツジにぬりつけるという作業もしなかった。ただ、ロープによるしばりつけをとまなうベアリングだけが実行された。

耳印は、「イム」とよばれる。耳印をいれる作業は、「イムレフ」という。エルデニ姉さんがこれを自分の子畜に実施した。ウシ・ウマ・ラクダには烙印をやきつけるように、ヒツジ・ヤギには耳印をきる。これは、所有権をあらわす印となる。このほかに、母子関係を認識するために、耳にハサミをいれることもある。そのときは、耳の毛をすこし刈っていた。その切り方によって、エルデニ姉は実母実子の関係を把握するてだすけとしていた。ヤギは、ヒツジにくらべて個体識別がむずかしい。とくに子ヤギの区別はむずかしい。うまれたばかりの子ヤギを手にとって、毛にみられる部分的な色や、毛だまりのさがして、なんとか特徴を発見しようとする。しかし、そうした特徴がみあたらないと、彼女は耳の毛



耳にハサミを入れて印をつける

をすこしばかり直線にカットして模様をいれる。そうして、記憶の補助とするのである。母ヤギの耳にはそのような印をつけない。だから、この印は彼女だけしか理解できない。個体識別に役だてるための、記憶の契機としていのである。きょうは、こうした模様のための耳切りではなく、烙印に相当する耳印をいれる。

ダンゼン一家の群れのなかには、五種類の耳印がみられる。本家と分家の印にくわえて、分家として住んでいるホクシン・エージ、さらに羊人であるソヨルト、エルデニチメグという五つの印が区別されている。こうした耳印は、個体を識別するという認知のためのものではない。あくまでも、他人に対して所有権を証明するためのものである。たとえば、つぎのようなエピソードがある。

ウジチャが結婚したとき、チョルム姉さんが一頭のメスヒツジをプレゼントした。それは、シャル・ハルザン・ホブタイ・エム・ホニだった。これは、「頭全体が黄色く、鼻面が白く、耳のみじかい、メスヒツジ」という意味である。前年は、



切った耳の一部を糸にとおす

ポンツォク家の群れをひとつにしていたが、分けるときにその一頭をのこしてしまった。ソヨルトが、ウジチャのヒツジと知らずにのこしてしまった。チヨルム姉からウジチャのもとへ所有権がうつされたヒツジには、耳印が左右両方についていて、ソヨルトはよその家のものだと思ったにちがいない。このヒツジがいないと気がついて、ポンツォク家にみにいったところ、車にまさにその毛皮がある。食べられてしまったのだ。ところが、ポンツォクもゆずらない。うちにもこういう模様のヒツジがいるから、まちがうはずはない、といいはって、ウジチャのいい分を信じない。屠殺されたばかりなので、頭がまだその場にあった。耳印をたしかめることができた。それで、自分のヒツジであることを主張することができた。非をみとめたポンツォクは、おまえのすきなメスヒツジをとれ、とウジチャにいった。

このように、耳を切るといふ印つけは、烙印と同様に、あくまでも所有権を明示するためのものである。エルデニチメグ姉さんは、自分の子ヒツ

ジ・子ヤギに耳印をいれた。ヒツジたちの右耳にはさみをいれる。うしろから一本切りこみをいれ、かつ耳の先を四角に切りとった。切りとったものを糸でつないで、自分の所有するヒツジ・ヤギのうち何頭が出産をすませたかをかぞえた。

耳の先を四角に切りとる耳印の形は、オニとよばれる。オニといえば、矢はずや針のめどをさす。その形をさしているのであらう。また、きりこみはガンザガとよばれる。ガンザガというのは、鞍につけられた荷物をしぼるための革紐である。ぶらぶらとぶらさがるものの代名詞といってもよい。一直線に切りこみをいれられると、細い方の部分は、やがてだりりとたれる。それで、ガンザガとよばれるのであらう。ガンザガには後方から切りこむ場合と、前方からの場合とがあつて、それぞれ「うしろから」「まえから」と区別される。このように、単純な切りこみの組合せによつて、近隣あるいは親族からの区別を可能にするのが、耳印である。

ちなみに、本家の耳印は、左耳に「うしろからのガンザガ」。分家のそれは、おなじく左耳に「ズルフ」とよばれる、めずらしいタイプ。ズルフとは心臓を意味し、耳の中央をまるくきりこむ形から名づけられたものである。ソヨルトの耳印は、本家とおなじ形を右耳にほどこし、かつ左耳には中央にきりこみをいれるもの。ホクシン・エージの場合は、エルデニチメグ姉さんとおなじ形を左耳にしたもの。こうしてみると、右耳か左耳かという区別は重要である。

一般に左右というものは不分明である。どちらからみて左右なのかかわかりにくいものである。モンゴルでは通常、左を東という語で、右を西という語で表現するために、ますますわかりにくい。通常モンゴルでは西のほうが貴く、したがって右のほうが貴い。ところが、これは空間配置に関する左右であつて、動物個体の左右については、話がことなる。動物に対しては東西の語をもちいて表現することはなく、正誤という語で表現する。そして、正しい側というのは、ウマなら個体の左であり、ウシなら右

である。これは、乗馬や搾乳などのように家畜に接する人間の行為によって、決定される方向指示である。この用法によって、どちらからみるかという向きの問題をさけながら、左右を明確に表現することができる。

家畜がすべて共有されていた人民公社時代には、公社の下部組織である隊ごとに、耳印が決められていた。私有が許可されてから、ふたたび各牧戸ごとの印がほどこされるようになった。いまみている印は、あらたに所有権の主張がゆるされたことの、大いなる証しというべきであろう。

耳印は、春の出生時期もしくは秋にほどこす。夏は暑く、冬は寒いので、春もしくは秋がよいという傷口の回復がはやいときがのぞましいのである。出生時期がおくれた夏うまれの子ヒツジ・子ヤギには、秋に耳印をいれる。きょうは、エルデニチメグ姉さんが自分の子畜にハサミをいれた。翌日からは、時間のあいまをみて、本家、分家それぞれに耳印をいれることになる。

さて、子畜の死体処理。昨夜もまた一匹の子ヤギが死んだ。きのうまで下痢をしていた子ヤギである。この数日間、悪天候がわざわざいして、子ヒツジ・子ヤギがたくさん死んだ。これまでの子畜の死体をまとめて、この日処理した。皮をはいだのである。エルデニチメグ姉さんは、皮をはぎながら、昨夜子ヤギが死んだのは、自分のマノール（夜間の見張り）が不十分だったせいだ、と反省する。幾晩もつづけて見張りをするのは容易なことではない。昨夜の死亡はしかたがないのではないだろうか。それでも、エルデニ姉は自分がわるいのだといって、今晚もまたマノールにあたる。上着をきたまま寝るのだった。

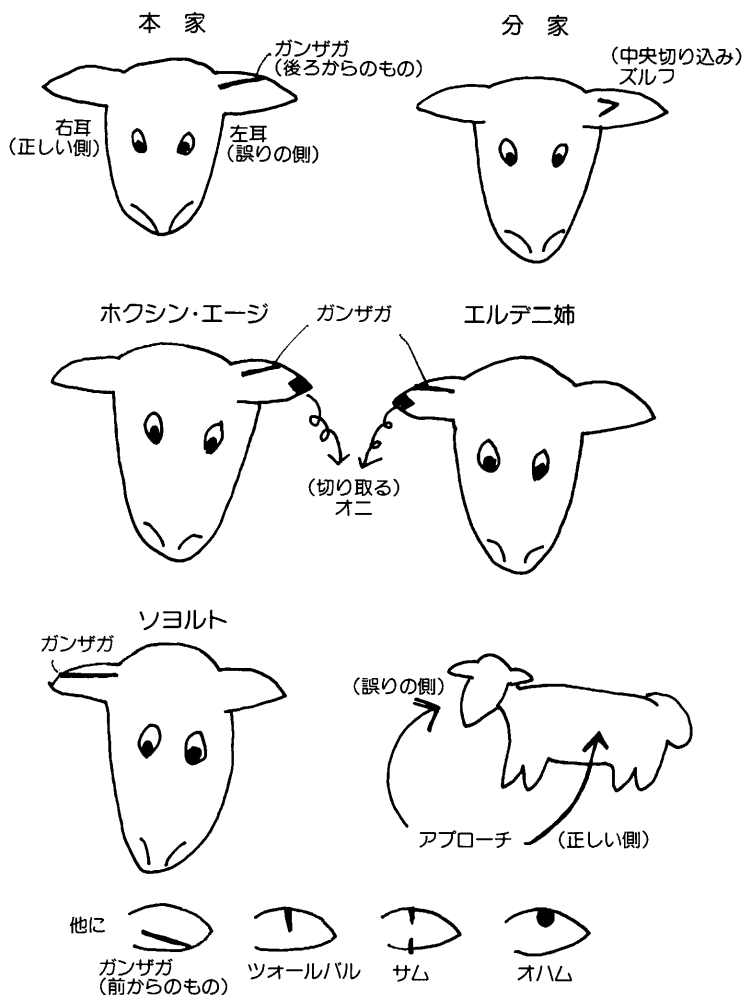


図11: 耳印一覧